

8人目の王、反キリストの正体—キーワードは「銅」

「神とモーセに逆らって言った。「なぜ、我々をエジプトから導き上ったのですか。荒れ野で死なせるためですか。パンも水もなく、こんな粗末な食物では、気力もうせてしまいます。」

主は炎の蛇を民に向かって送られた。蛇は民をかみ、イスラエルの民の中から多くの死者が出た。

民はモーセのもとに来て言った。「わたしたちは主とあなたを非難して、罪を犯しました。主に祈って、わたしたちから蛇を取り除いてください。」モーセは民のために主に祈った。

主はモーセに言われた。「あなたは炎の蛇を造り、旗竿の先に掲げよ。蛇にかまれた者がそれを見上げれば、命を得る。」

モーセは青銅で一つの蛇を造り、旗竿の先に掲げた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぐと、命を得た。」(民数記 21:5-9)



この出来事を理解するにあたって、関連した幾つかの聖句を考慮してみましょう。

「ある人が死刑に当たる罪を犯して処刑され、あなたがその人を木にかけるとすれば、死体を木にかけたまま夜を過ごすことなく、必ずその日のうちに埋めねばならない。木にかけられた死体は、神に呪われたものだからである。」(申命記 21:22 - 23)

民数記の記録をこの記述に照らして考えると、エジプトから導き出されたにも関わらず、不平をつぶやいたイスラエルは、「死刑に当たる罪」を犯したとみなされ、その死刑執行の手段として「火の蛇」を送られたことが分かります。

しかし、イスラエルは、罪を認め、悔い改めを表明したので、救済策として、罪を犯した人間の代わりに、銅の蛇を木に掲げ、蛇に噛まれても、個人的にその蛇を仰ぎ見るなら、死を免れるようにされた。という話です。

申命記の記述から、「木に掛けられた死体は呪われたもの」と見なされることから、神はこの銅の蛇を呪われたものと見なされたと考えることができます。

しかし、自分たちに致命傷を負わせた蛇の象徴である「のろわれた者」を仰ぎ見れば、死を免れるというのはどうしても理解しにくい事のように思えます。

しかし、実際にそのようにして、命を長らえることができ、事態は終息したわけですが、その後、イスラエルは、この出来事以来その後もずっと、「蛇崇拜」に陥っていたことが分かります。神の指示でモーセの作った銅の蛇は、人を救った蛇だから、というような考えが働いた結果であろうと考えられます。

「彼（ヒゼキヤ）は、父祖ダビデが行ったように、主の目にかなう正しいことをことごとく行い、…モーセの造った青銅の蛇を打ち砕いた。イスラエルの人々は、このころまでこれをネフシュ

タンと呼んで、これに香をたいていたからである。」(列王下 18:3,4)

(この出来事と直接の関係があるかどうかわかりませんが、「蛇崇拜」はギリシャ神話にも登場します。杖にヘビの巻きついたモチーフは「アスクレーピオスの杖」(蛇杖)と呼ばれ、医の象徴として世界的に用いられWHO(世界保健機構)のシンボルともなっています。



WHOのシンボル



アスクレーピオスの蛇杖

そして、この出来事を踏まえ、キリストは、ご自身についてこう語られました。

「そして、モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。」(ヨハネ 3:14 - 15)

つまりイエスは、死にゆく罪のある人類の身代わりとして、ご自分が殺され、その死体が木の上に掛けられることを示されました。そしてそれは「信じる者がみな永遠の命を持つため」という、ご自分の果たされる役割を述べておられます。

銅のヘビが供えられても、蛇に噛まれた人が銅の蛇を見上げなければ、そのまま命を落としたに違いありません。同様に、キリストの贖いがなされても、個人としてイエスを仰ぎ見る、つまり信仰を働かせなければ、命を得ることはできません。

キリストが銅の蛇に言及して、同じように挙げられねばならないと言われた意味はおおよそ、このような意味であったと思います。

以上で、「火(銅)の蛇」について聖書中の記録は全てなのですが、しかし、それにしてもどうして「蛇」なのかはどうしても引っかけられます。

「初めからの蛇」以来、聖書を読む人にとってそれは、最も忌み嫌うもので、どこから見ても良いイメージはありません。また、蛇は確かに「神ののろい」の宣告を受けています。

「主なる神は、蛇に向かって言われた。「このようなことをしたお前はあらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で呪われるものとなった。」(創世記 3:14)

まず、「火の蛇」は神からの不興の現れであり、またこの時のイスラエルの罪の象徴であるとも言えます。それに噛まれて死ぬというのは、分からなくはありませんが、それにしても、別に「蛇」でなくても良かったのではないかという思いは否めません。

そして、神からの指示は「火の（燃える）蛇」を作るように、ということでしたので、その燃える蛇にそっくりな像を作るためにモーセは材料を「銅」で作りました。

太陽光線が当たれば「燃える蛇」に見えたことでしょう。

この銅のへびを木に架けたということは、蛇自体を「死刑」にしたということでしょう。

それで、「蛇」は神からののろいの元にあるという事から、確かに「呪われた」ものの象徴だから「蛇」が用いられ、キリストも人間の罪を代わりに負われて、「呪われた者」と見なされて磔刑に架けられたと言え、その通りなのですが、それにしても、何も「蛇」で無くとも良かったのではないだろうかとか、どうしてまた、よりによって「火の色の蛇」だったのだろうかと考えていましたら、やはり、恐らくこういふことなのだろうという、一つの結論に達しましたので、ここに付け加えておきます。

イスラエルが陥ったのは、銅の蛇（ネフシュタン）崇拝（偶像崇拝）であり、ヒゼキヤはその習慣を断ち切るためにそれを打ち壊しました。今日、その銅の蛇とキリストが融合し、同一視され、今度は十字架の蛇やイエス像を拝んでいる人々に対して、もし今日ヒゼキヤが生きていたら、どのような行動を取るのでしょうか。



ウィーン カールス教会

アントワープの聖母大聖堂

ネボ山の教会前
十字架と蛇

教会のステンドグラス

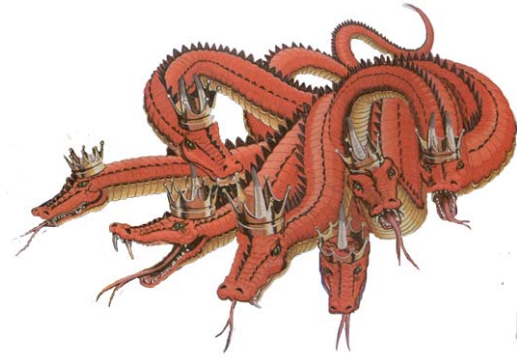
さて、この蛇が単なる普通に見られる蛇であつたら、これで話しはこれで全て終わりになると思うのですが、これが、「火の（燃える）蛇」つまり緋（赤色）の蛇であり、しかも、「銅」のへびであることに、更なる意味があることを発見しました。

「また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、火のように赤い大きな竜である。・・・この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。」（黙示録 12:3,9）

ここで、創世記 3 章の記述にある、蛇とサタンの関わりが再び取り上げられます。

しかしこのたびは、成長して巨大化しており、何と「火のように赤い」という特徴を持っています。

龍は、天から投げ落とされた後直ちに「女」に向かって迫害を開始し、それに失敗すると今度は胤の残っている者を迫害するために、自分の化身を作ります。



「一匹の獣が海の中から上って来るのを見た。これには十本の角と七つの頭があった。それらの角には十の王冠があり、頭には神を冒瀆するさまざまな名が記されていた。」(黙示録 13:1)



そして、この「十本の角と七つの頭」の獣は 17 章にも登場します。

「わたしは、赤い獣にまたがっている一人の女を見た。この獣は、全身至るところ神を冒瀆する数々の名で覆われており、七つの頭と十本の角があった。」(黙示録 17:3)

13 章の獣は初登場の時の様子、世界の舞台にお目見えする時の姿を描写したのですが、17 章の方は女を乗せた状態で登場し、この度は、「赤い色」をしていると特記され、「あなたが見た獣は以前はいたが、今はいない。やがて底なしの淵から上って来る(17:8)」と表現され、それは以前の 5 人の内の一人であり、実は 8 人目の王でもある事が示されています。

双方の外見は同じですから、この両者は基本的に同じ者でしょう。



この 10 本の角を持つ獣は、ダニエル 7 章に登場する第 4 番目の獣で、後に 10 本の角が生じたもの、つまりローマ帝国の最終的な状態を指し示しています。これは古代ローマ帝国が十人の王つまり十カ国からなる連合国として再起することを示したものとと言えます。

この獣が「海から上がる」というのは、地中海から上がる、つまり地中海沿岸諸国を指し、古代ローマ帝国の復興である事を示すものであろうと思います。それで宗教的にはやはりキリスト教を背景に持つものと考えられます。

そして、その 4 番目の獣には更なる変化が続きます。

「その頭には十本の角があり、更に一本の角が生え出たので、十本の角のうち三本が抜け落ちた。その角には目があり、また、口もあつて尊大なことを語った。これは、他の角よりも大きく見えた。」(ダニエル 7:20)

それで、この一番最後の「小さな角」がリーダー格として、獣全体を牛耳るイニシアチフを取るようになることが示されています。

この「小さな角」率いる獣こそ、最後の8番目の王であり、かつ黙示録17章に示されている緋色の獣であるということです。



そして、この王は「以前はいたが、今はいない、以前の5人の内の一人」ということで、ローマ以前の者で、「北の王」である事を考えると、それは「古代ギリシャ帝国」からの者だと言うことが分かります。

つまり終末期の復興ローマは当初、ローマを継承する十カ国で成立しますが、誕生して（恐らく直ちに）、致命的な打撃を受けます。

「この獣の頭の一つが傷つけられて、死んだと思われたが、この致命的な傷も治ってしまった。そこで、全地は驚いてこの獣に服従した。」（黙示録 13:3）「剣で傷を負ったがなお生きている」（13:14）

この「剣による致命的な傷」という表現は、戦争、（第3次世界大戦かもしれない）による壊滅的な打撃を被り、おそらくその際に3カ国は、国として壊滅するか、連合国から除外され、その救済者として出て来るのが「小さな角」でしょう。

また、この者は、テサロニケⅡ 2章で「不法の者、滅びの子」と呼ばれ、「反キリスト」の権化であり、「北の王」また「憎むべき荒廃をもたらすもの」と同一のものです。

そのようにして、致命的な傷は癒え、人々は驚嘆するということになります。

そしてこの時点で「海から上がった獣」は「緋色の野獣」としてリニューアルすることになります。

ここで、緋色の野獣である、このギリシャ出身の北の王のプロフィールを見ておくことにしましょう。

「四つの国の終わりに、その罪惡の極みとして高慢で狡猾な一人の王が起こる。

自力によらずに強大になり驚くべき破壊を行い、ほしいままにふるまい、力ある者、聖なる民を滅ぼす。

才知にたけ、その手にかかればどんな悪だくみも成功し驕り高ぶり、平然として多くの人を滅ぼす。ついに最も大いなる君に敵対し人の手によらずに滅ぼされる。

代わって立つ者は卑しむべき者で、王としての名誉は与えられず、平穩な時期に現れ、甘言を用いて王権を取る。

この王は、僅かの腹心と共に悪計を用いて多くの者と同盟を結び、勢力を増し、強大になって行く。」(ダニエル 8:23-25; 11:21,23)

高慢さと、悪知恵に長けた聡明さにより自分を神とする、正にサタンの化身とも言うべき者ですが、この者は最後の「北の王」として、登場しますが、そのモデルはシリアの王アンティオコス・エピファネスであり、その記録はマカベア書に記されています。

これは単なる推測ですが、恐らく終末期の「北の王」もエピファネスと同じセレコウス朝シリアから起こるとすればその領土は現代とさほど変わりませんので「シリア/レバノン」辺りで、もしかするとシリア・アラブ共和国の大統領かもしれません。もしそうだとすると、その宗教はイスラームということになります。

そもそも「卑しむべき者で、王としての名誉は与えられない」という、文字通り小さな存在ですが、瞬く間に強大になって行きます。その手腕、才能は、「高慢で狡猾、甘言、悪計を用いて多くの者と同盟を結ぶ」というものです。

「自力によらずに強大になる」とあるように実際、この緋色の野獣には強力なサポーターが現れます。

「地から上がる獣」です。

「わたしはまた、もう一匹の獣が地中から上って来るのを見た。この獣は、小羊の角に似た二本の角があつて、竜のようものを言っていた。この獣は、先の獣が持っていたすべての権力をその獣の前で振るい、地とそこに住む人々に、致命的な傷が治ったあの先の獣を拝ませた。」(黙示録 13:11,12)



このサポーター、「地から上がる獣」の正体は何者でしょうか。

地から上がる野獣 つまり「海」の反対側、大陸側から上がり、2本の子羊のような角がある、というのは、ダニエル8章で言及されている2本の角のある雄羊であり、すなわちメディア・ペルシャ。古代の帝国のような大国ではないゆえに子羊と表現されているに違いありません。メディア・ペルシャは現代のイランとイラク辺りであろうと思われます。これの宗教的背景もイスラームです。

そして緋色の野獣にはもう一つ強力なサポーターがいます。

この獣の登場時のシーンを思い起こして下さい。

この緋色の獣は「女」を載せています。この「女」は「大淫婦、大バビロン」と表現されています。この「女」はバチカンと捉えて間違いないでしょう。

(この点の詳細は「31 大いなるバビロンの正体を見極める」をご覧ください。)

バチカンとの交渉で何らかの甘言、悪計により、どちらもゆくゆくは自分がNWO (New World Order, 新世界秩序) のボスになるという双方の利害が一致して、手を結ぶことになると考えられます。

さて、このサイトの記事はどれもそうですが、聖書の研究から、こう理解できるという視点に基づいて記述しています。

現行の世界情勢なども合わせて調査していますが、現状に基づく予測から発しているものではありません。

実際、宿敵同士であり、一触即発の状態にあるイスラエルとシリアの情勢からみれば、今のところこの両国が見せかけだけにしても、同盟を結ぶようになるとは考えられません。

しかし、聖書預言の成就から言えば、おおよそこうした流れになると考えています。

最後の「北の王」「反キリストは、全世界を牛耳り、宗教的にも自らを崇拜させることになる、ということですから、それまでの歴史上、例のない、絶対にあり得ないと思える譲歩、融合が諮られない限り実現しないでしょう。

そのために百戦錬磨の諸国を政治的にも宗教的にも経済的にも、納得させるだけの悪知恵が必要でしょう。もっとも背後に「この世の神」であるサタンの全面的バックアップ、というより、完全にサタンの代理として用いられるわけですから、それも不可能ではないでしょう。

「北の王」はイスラームですが、その力の母体は復興ローマであり、その宗教的背景であるキリスト教、そして常に大バビロンと行動を共にすることにより、バチカンの強大な宗教的影響力をも我が物にして、物事を意のままに行い成功するということです。

それはダニエル 1 1 : 39 の「強固な砦の数々を異国の神に頼って攻め…」という成就となるものと考えられます。

これで、ダニエルの4頭の獣、或いは4つの金属からなる巨像のすべての国が終末期に一斉に出そろうこととなります。



これで、山から切り出された石（神の統治権の表明である、キリストの王国）が復興ローマを打ち砕く時、他の3つの国も共に粉々に粉砕されるということでしょう。

さて、銅のへびの話しから始まったこのレポートですが、これから、改めて「銅」と「蛇」と「反キリスト」との関わりを明らかにしてゆこうと思います。

最後の7頭 / 10角獣が赤い色している理由は、同じ7頭 / 10角の火のような色の龍（年を経た蛇、悪魔サタン）の化身であるからに他ならないからであるとすでに述べました。

ではなぜ年を経た蛇は赤いのかという事ですが、最初に扱ったように、民数記に出て来た罪の象徴である蛇も火のような色の蛇でした。この両方の蛇が共に「火のような色」であることは単なる偶然ではないでしょう。

実際、赤は「罪の色」として聖書は表現しています。

「たとえ、お前たちの罪が緋のようでも雪のように白くなることができる。たとえ、紅のようであっても羊の毛のようになることができる。」（イザヤ 1:18）

では、緋色の獣と民数記の銅のヘビとはどのような関わりがあるのでしょうか。

ここで反キリスト、(ギ語：アンティ・クリストス) の正確な意味を把握しておく必要があります。

ギ語：アンティは「反対」という意味もありますが、本来のそして通常訳される場合それは、「代わりの」という風に訳されます。

(詳しくは「39 反キリストの権化「不法の人」の正体を暴く」をご覧ください)

ですから、反キリストの本来の意味は代替キリストもしくは擬似キリストという意味です。

ですからこの者は、単にキリストに逆らうというより、キリストの働きを代行する、つまり自らをキリストに見せる、ということです。

この者は多くの者と契約を結ぶと記されていますが、サタンは天から落とされるとすぐに「子を産んだ女」つまりイスラエルを迫害しますが「地が救助に回り」、これを救出し、結果イスラエルに「平和だ安全だ」という声上がるようになります。

また、復興したローマ合衆国の致命的な傷を治します。この時活躍（暗躍）するのが、反キリストであり、緋色の野獣そのものです。そしてその結果、自分を崇拜するように仕向けます。つまり緋色の野獣は、自分を仰ぎ見る者を致命的な傷から癒し、死を免れさせるものであるということをお大々的に宣伝することになります。それはつまり、この出来事が「人々は龍を崇拜する」という預言の成就するときとなります。

「この獣の頭の一つが傷つけられて、死んだと思われたが、この致命的な傷も治ってしまった。そこで、全地は驚いてこの獣に服従した。竜が自分の権威をこの獣に与えたので、人々は竜を拝んだ。人々はまた、この獣をも拝んでこう言った。「だれが、この獣と肩を並べることができようか。だれが、この獣と戦うことができようか。」（黙示録 13:4,5）

まさに、キリストに成り代わった「火のような色の年を経た蛇」が高く上げられることになります。

少し前に「[剣による致命的な傷]という表現は、第3次世界大戦によるものかもしれない」と述べましたが、恐らくこれも、擬似ハルマゲドン、つまり、神の裁きによる最終戦争とい

うイメージを植え付けるための宣伝活動が見られるのではないかと考えます。
完璧に仕組まれた、偽ーメシアによる、偽ー預言の成就が計画されているようです。

「偽メシアや偽預言者が現れて、大きなしるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちをも惑わそうとするからである。

あなたがたには前もって言うておく。だから、人が『見よ、メシアは荒れ野にいる』と言っても、行ってはならない。また、『見よ、奥の部屋にいる』と言っても、信じてはならない。」(マタイ 24:24-26)

ところで、モーセは、「火の（燃える）蛇」の像を作る際、「銅」を用いました。それは製作可能な赤く輝く素材として適切でしたが、緋色の野獣に関する様々な預言を見ると、単にそれだけではない、非常に興味深い、「銅」であった理由が見付かります。

では次に、その緋色の獣、つまり「小さな角」「8番目の王」と「銅」との関わりを考察しましょう。

古代ギリシャと「銅」との関わり

ペリシテ（フィリステア）人についてー

もともと（B.C.1500 頃）シリアやパレスチナ地方を中心とする地中海東岸地方には、セム系の先住民カナーン人がいました。（この「ペリシテ」という名称から現代のその地を「パレスチナ」と呼んでいます。）

ペリシテ人とは紀元前 13 世紀から 12 世紀にかけて地中海東部地域に來襲した「海の民」と呼ばれる諸集団を構成した人々の一部であり、カナーンの地に定住し、エーゲ海域とギリシアのミケーネ文明を担った人々に起源を持つとする説が有力であるとされています。

聖書の記述では、彼らのルーツはハムの子ミツライム（エジプト）の子であるカフトルの子孫であるとされ、「カフトル島から来たカフトル人」と呼ばれています。（創世記 10:13-14、申命記 2:23）。

聖書の記述によれば、ペリシテ人はアブラハムの時代にはすでにカナンの地に定住していました。

カフトルが実際にどの地域を指しているのかについても諸説あるようですが、クレタ島、キプロス島、あるいはアナトリア地方の小島の 1 つ、などの候補が挙げられています。

いずれにしても古代ギリシャ帝国領土です。今日ではクレタ島であるとの見解がもっとも支持されているようです。

キプロスの語源は、古代ギリシャ語の銅（Chalkos）由来説があり、いずれもこの地帯に多かったもので、この地名（キプロス）が、ラテン語や英語で「銅」を意味する単語の語源となっています。

銅 (Cu: カッパー) の由来 ー

紀元前3, 000年頃、銅はキプロス島に多く産しました。

始めはキプロスの鉱石と呼ばれていましたが、その後ただシフリウム (cyprium) と呼ばれるようになり、更にシフラム (cyprium)、キューフラム (cuprum) と変わりました。

これが英語のカッパー (copper) の語源で、化学記号のCuはこのラテン語の最初の2文字をとったものです。

それで、古代ギリシャは「銅」と深い関わりがあることが分かります。

さて、このペリシテ人とイスラエルは実に何千年もの間、敵対関係にあるわけですが、とりわけ、聖書物語の中で印象的なペリシテ人と言えば「ゴリアテ」でしょう。

ゴリアテは全身、銅の武具で身を固め、銅の投げやりを持ち、その先端は鉄でできていました。

「…その頭には銅のかぶとがあり、…その小札かたびらの重さは銅で五千シェケルであった。また、その足の上には銅のすね当て、両肩の間には銅の投げ槍があった。また、…その槍の刃は鉄で六百シェケルあった。」

(サムエル第一 17:5 - 7)



このゴリアテとダビデの戦いの記述に関するこれらの記述には、ダニエル書の「北の王」や黙示録のキリストの裁きに関する記述との興味深い関連が読み取れます。

「わたしは獅子も熊も倒してきたのですから、あの無割礼のペリシテ人もそれらの獣の一匹のようにしてみせましょう。彼は生ける神の戦列に挑戦したのですから。」

今日、主はお前をわたしの手に引き渡される。わたしは、お前を討ち、お前の首をはね、今日、ペリシテ軍のしかばねを空の鳥と地の獣に与えよう。全地はイスラエルに神がいますことを認めるだろう。

主は救いを賜るのに剣や槍を必要とはされないことを、ここに集まったすべての者は知るだろう。この戦いは主のものだ。主はお前たちを我々の手に渡される。」(サムエル第一 17:36,46,47)

簡単にまとめますと、次のようになります。

ゴリアテの特徴： 神を嘲弄する。 戦いを挑む。

ダビデの特徴： 杖を持って立ち向かう。 ゴリアテを獣の1匹のようにみなす。
剣によらず打ち倒す。その死骸を鳥に与える。

特に、17:36にある「獅子も熊も…獣の一匹のように」という表現と、ダニエル4章の「4

頭の獣」の記述を比較すると、第1ー獅子、第2ー熊、第3ーヒョウ、第4ー恐ろしい獣 とあって、すでに、獅子も熊も倒してきたので次の獣、つまり「ゴリアテをヒョウのような獣の一匹とみなす」という解釈を立てると、ゴリアテはギリシャ帝国を表すと捉えることが可能になります。

これと次のダニエル書、及び黙示録の記述を比較して下さい。

「彼（小さな角）はいと高き方に敵対して語り」（ダニエル 7:25）

「驕り高ぶり、…ついに最も大いなる君に敵対し…」（ダニエル 8:25）

「すべての神にまさる神に向かって恐るべきことを口にし」（ダニエル 11:36）

「獣は口を開いて神を冒瀆し、神の名と神の幕屋、天に住む者たちを冒瀆した。」（黙示録 13:6）

（王の王、主の主は「自ら鉄の杖で彼らを治める。」（黙示録 19:15）

「空高く飛んでいるすべての鳥にこう言った。「王の肉、千人隊長の肉、権力者の肉を食べよ。」（黙示録 19:18）

「北の王」の特徴： 神を嘲弄する。 戦いを挑む。

キリストの特徴： 杖を持って立ち向かう。 獣を滅ぼす。

口の剣（ことば）によって裁く。その死骸を鳥に与える。

さて、ゴリアテは全身を「銅」で固めた姿で、銅の槍の先に鉄の歯を付けた武器を用いました。ここに「銅」と「鉄」の合体のパターンを見いだします。次にこの「銅」と「鉄」の合体について考察しましょう。

大バビロンの「鉄」と「銅」についてー

この、銅と緋色の野獣との関連が見えてきますと、大バビロンの滅び、また、「彼女から出なさい」という叫び声がどのタイミングで出され、最終的滅びまでにどれくらいの猶予があるのかも、自ずと見えてくるように思えます。

ところで、初めにお断りしておきますが、預言として言及されている、もしくは、そのようなニュアンスで暗示されていると断言できる記述については論を待ちませんが、聖書中に記述されている出来事で、預言そのものと言える根拠はないまでも、預言を理解するためのヒント、或いは洞察を与えるものという位置づけの記述はあると思います。

ダニエル4章は、まさにそうした記述であろうと考えております。

大バビロンと古代バビロニアは、明らかにリンクしてしるはずであり、明確な預言に、古代バビロニアの記述は何らかの光を当てるものと考えて良い根拠はあります。

「この大バビロンは、私の権力によって、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が建てたものではないか。」（ダニエル 4:30）

それで、まず、押さえておきたい点は、終末期に関する時間（期間）的要素として、ダニエルの70週の預言とその最後の1週、つまり7年間、そして、その「週の半ば」という期間と黙示録に見いだされる「三とき半」つまり「1260日」、或いは42ヶ月間に付いての整合性を考慮しますと、ネブカドネザルに生じた「7つの時」は「最後の1週」に理解の光を与える記述として考えて良い理由があります。

では、ネブカドネザルの7年についてそのあらましを述べておくことにしましょう。

ネブカドネザルを表す巨木は、切り倒され、「銅と鉄」のタガを架けられた状態で7年間が定められ、その期間、王は獣のような生活を余儀なくされ、それが満了した時、理性が戻り、神の至上性を認めるというものです。



これまでの論議ですでに明らかにして来ましたが、緋色の獣は、鉄のローマの母体に生えた銅のギリシャからの小さな角が生じた、ローマとギリシャの合体からなると示して来ました。あるいは、その正体は本質的にギリシャであり、それがローマという力（武器）を用いるという形で成立しているということです。（この視点はネット上で英語版を含め多くのサイトを調査しましたが、どこにもないようです）

それで、バビロニアの巨木が倒され「鉄と銅」のタガが掛けられる7つの時は、70週の最後の1週（7年）と同期間で密接な関連があると考えられます。つまり鉄の復興ローマ、そして後の緋色の野獣が大バビロンを牛耳る期間でもあるという事です。

その間、大バビロンは、完全に人間性（理性）を失い獣のように、或いは緋色の獣と同化し、あらゆる蹂躞を行う組織と化すと考えられます。

ところで、これは、大バビロンが「一日のうちに、さまざまの災いが、死と悲しみと飢えとが彼女を襲う。」（黙示録 18:8）という記述と矛盾するでしょうか。

実は、この大バビロンが倒れた！という記述は2度言及されており、最初の言及は14:8です。

「倒れた。大バビロンが倒れた。怒りを招くみだらな行いのぶどう酒を、諸国の民に飲ませたこの都が。」（黙示録 14:8）

この時は宣言がなされるだけで、それ以上の具体的な滅び等については何も記されてはいません。

実際の詳しい滅びの説明は18章で扱われています。

「天使は力強い声で叫んだ。「倒れた。大バビロンが倒れた。」（黙示録 18:2）

日本語で「倒れた」と聞くと、倒壊、倒産のイメージが強いです。

しかし、ギリシャ語の原語的には必ずしもそこまでの意味を常に持つとは限らないことが分かります。

（ギリ語：ἔπεσεν エペセン [英語：fall]）

下に挙げたのは、このギリシャ語を辞書で検索した際の日本語訳です。

○落ちる (=drop), (雨・雪などが) 降る, 低下する, 下がる, 低落する, 下降する, 倒れる, 顛落する, 転倒する, 倒壊する, 決壊する, 没落する, 転ぶ, 落石する, 転落する, , 低くなる, 落下する, 落城する, 滅びる, 滅ぶ, 滅亡する, (幕などが) おりる

「顛落する」(てんらく) という語もありますが、これが、前後の文脈から考えると最も本来の意味合いに近いのではないかと思います。

「倒れた」と言われた後で、とぼつちりを受けたくないなら、彼女から出るよう、勧められていますので、この時点でまだ完全に滅ぼされているワケではないでしょう。

天からのみ使いの強い声でのこの叫びは、大いなるバビロンに注意を喚起する目的で、語られているもので、それまで、実に永い年月に渡って「大バビロン」は自分は女王として座す。嘆きを見ることはない」と豪語していたわけだから、突然に、青天の霹靂のごとく、いきなり落ちぶれたということを知らせているのでしょう。

それで、「彼女は倒れた！ 大バビロンは倒れた」の部分を分かりやすく翻訳してみると、「彼女は、完全に落ちぶれた！ 大バビロンは幕を下ろした」というような意味であろうと思います。

サタンは落とされるとすぐ、「女」を迫害しますが、滅びを免れ、実際これは神の目的に沿ったもので、荒野に導かれそこで3時半(1260日)の間、養われます。しかし、その安全な状態は、「小さな角」のまやかしの契約によるもので、これで安心してしまうユダヤ人は3年半後の「突然の滅び」を被ることになります。その最初の時点で大バビロンは「小さな角」の計略に陥り、女王から落ちぶれ、顛落することになるのでしょう。

それでバビロニアを象徴した巨木が切り倒されるとは、大バビロンは倒される、つまり幕が引かれ、否応なく道化師を演じさせられるということの意味していると考えられます。つまり、ネスカドネザルの巨木が切り倒されて、鉄と銅のタガがかけられて7年間を経る。という記述は、バビロニア(大バビロン)はその影響力、女王としての権力は、「鉄」の復興ローマとそれを牛耳る第8番目の王である、古代ギリシャに由来する「銅」の反キリストに、事実上剥奪され(牛耳られ)、7年間(3時半+3時半の間)反キリストの神格化に利用される事になるでしょう。そして最終的に、荒れ廃れさせ裸にさせられる、つまり、バチカンの資産は全て強奪され、荒廃させられるということでしょう。

ダニエルの第4獣の「鉄」と「銅」についてー

ダニエル7章の第4番目の獣(ローマ)にも実は「銅」の要素を含んでいることを発見しました。

「…それは他のすべてと異なってことのほか恐ろしく、その歯は鉄、そのかぎづめは銅で、むさぼり食い…」(ダニエル7:19)



最後に、緋色の野獣が「鉄」と「銅」の合体であるというもう一つの例をご紹介します。

この論議はすでに「46 黙示録の 8 番目の王の正体ーローマとギリシャの合体」の中で扱っている内容ですが、ここに一部抜粋しておきます。(詳しくは上記の資料をご覧ください)

ダニエル2章の「巨像」についてー



像の最終的な状態は鉄に、「粘土」が混じっている状態です。

そしてその像がついには、砕かれることになるのですが、その部分の描写に不思議な記述があることに気付きました。

それは、王が見た夢の内容を再現する描写と、「解き明かし」として述べている部分の、砕けて行く順番に違いがあるのです。

まずは夢の内容の説明の部分から。

「ついにひとつの石が人手によらずに切り出され、それが像の鉄と成形した粘土とでできた足のところを打って、これを砕きました。

その時、鉄も成形した粘土も銅も銀も金も皆ともに砕けて…」

(ダニエル 2:34 - 35)

これが、解き明かしの記述になると、金属の順番が入れ替わっています。

「山からひとつの石が人手によらないで切り出され、それが鉄、銅、成形した粘土、銀、金を打ち砕いた」(ダニエル 2:45)

注意深く読むと、夢では砕かれるのが「鉄、粘土、銅、銀、金」という順序で描写されます。これは、石が、像の一番下に当たることで生じるので、自然な描写です。

さらに厳密に言えば、「石は」「鉄と粘土の足」の部分に当たります。

それによって全体が崩れるのですが、「それで、像全体が…」という描写ではなく、なぜか、細かく、全ての素材を列挙しています。

描画的に表現すると、「鉄と粘土、銅、銀、金」の4つを順に挙げるのがもっとも自然だと思います。

ところが、解き明かしの説明では、「鉄、銅、粘土、銀、金」という順序になっているのです。まして、粘土は鉄に「混じって」いるのに、銅の次のなのです。

これは、翻訳上の問題ではなく、どの翻訳でもそうですし、ヘスライ語の原語で見ても、その順序になっているのです。

明らかにそのように記す預言的意味があったということでしょう。

なぜ、銅と粘土が入れ替わっているのか。

実体の順序で表現すると、ローマ、ギリシャ、10本の角、メディア・ペルシャ、バビロニア

という順序になります。

ここで、比較のために、ダニエル 7 章の 4 頭の獣が、どのように殺されるのかの順番を確かめてみようと思いました。

「わたしはその時、その角の語る大仰な言葉の響きのゆえにずっと見ていた。わたしがずっと見ていると、ついにその獣は殺され、その体は滅ぼされて燃える火に渡された。また、残りの獣たちについては、その支配権は取り去られたが、一時また一時節のあいだ命を延ばすことが許された。」(ダニエル 7:11 - 12)

「そののち法廷が座に着いて、その者の持つ支配権をついに取り去った。これを滅ぼし尽くし、全く滅ぼし去るためである。(ダニエル 7:26)

ここでは、獣の角の中のボスとして、小さな角が「獣」を牛耳って、行動しているときに、獣は殺される事が分かりますが、明確に分からないのが、次の部分です。

「残りの獣たちの支配権は取り去られたが、一時節、延命が許された。」というところです。

これによれば、他の王国、つまり豹（ギリシャ帝国）、熊（メディア・ペルシャ）、獅子（バビロニア）は、支配権だけ滅びて、「獣」としては、その後幾らか、存命する事が分かります。また、7:26 の表現からすると、第 4 番目の獣でさえ、まず、司法上の裁きとして「支配権を取り去る」ことが成されます。

ですから、獣の裁きは、先ず「捕らえられ」つまり支配権が取り去られ、その後、滅ぼされるという段階があることが分かります。

黙示録の記述からも、「野獣は捕らえられ、…生きたまま、硫黄で燃える火の湖に投げ込まれた。」(啓示 19:20) とあり、そのことが確認できますが、他の王国がどうなったのか具体的な記述はありません。

さて、再びダニエル 2 章に戻りますが、今注目している 2:45 は、巨像の足に「石」が当たった直後の出来事を描写している場面と思われるので、その瞬間全てが、滅ぼし尽くされて、消滅するというより、その時、その順番で支配権が取り去られるということを示していると考えられます。

「鉄の足」の末端である復興ローマは「粘土」という選挙によって選ばれた十人のそれぞれの主権を持つ王たちによって、1つの連合国（7人目の王）をなし、さらにその末期にギリシャ出身の「小さな角」（8人目の王）が合体した形で存在しています。

それで、「鉄、銅、粘土、銀、金を打ち砕いた。」という描写はすなわち、先ず母体である復興ローマ、次いでギリシャ、そして十人の個々の王たち、それからメディア・ペルシャ、バビロニアのそれぞれの支配権が取り去られる。ということの意味しているに違いありません。